

点のため、同じになるとは限らないが、業界としてはやはり気になるところ。18年も不動産価格の動向から目が離せない。

絶滅危惧種のバンカラ早大生
入居者も学生からサラリーマンに

◆管理仲介のアリツグ商事(東京都新宿区)は早稲田大学から徒歩5分圏内のところに店舗を構えている。三根勇一社長(43)によると、最近の早稲田大学生は昔の「バンカラ」「苦学生」なイメージから大きく変化したという。全体的に華やかな雰囲気、特に女性や留学生に人気の国際教養学部など新設学部が次々とできてきた。その変化は顕著になったようだ。近隣に賃貸アパートを多く持つ同社にも影響し、数十年前の築古風呂なし物件に住む早大生の姿は、今ではほとんど見られない。代わってサラリーマンが入居する場が多いそうだ。「社会人よりも学生の方が良い暮らしを

する時代になったんだね」と三根社長は少しはかなげに話す。

本に感銘を受け即行動
人と会う重要性を知る

◆管理仲介のトラストバンク(大阪市)の沖中俊貴代表(51)の必読書は本田健さん著作の『ユダヤ人大富豪の教え』だ。約1年前に読んでから感銘を受け、本田さん主催のセミナーにも足を運んでいる。「本の中にある『人と会って話をする』重要性を改めて学びました」。セミナー後の懇親会で、早速参加者に声をかけ、その場で3人とアポイントを取った。商談も現在進行中なのだとか。「何でも素直に行動することが大事です」と家主の会代表でありながら、頭を垂れる沖中代表だった。

太陽光事業で利回り10%
ブーム去った後にも商機

◆再生可能エネルギーを供給するa-MAX(奈良市)は、今年より太陽光発電事業を始めた。太陽光発電は、買い取り価格が21円まで下落していることもあり、ブームは去ったとの意見が根強い。しかし、今井友彦社長(48)は、目を付けなくなった今こそ狙い目だと話す。「設置費用やエネルギー効率により、インシャルコストは以前よりずっと安くなった」。実際、同社が提供する太陽光発電は10%の利回りを最低水準としている。「空室のリスクもないため、安定した運用が可能です」。誰も見向いていないところに、ビジネスチャンスが落ちているのかもしれない。

知恵の自水

◇中古ワンルームマンションを販売する日本財託(東京都新宿区)が21日のマスコミ懇親会で配った『チロルチョコ』ならぬ『さいたくチョコ』。



▲「一室入魂」は社内の合言葉

学生よりも貧乏な社会人

今週の

玄関ネ夕